第２世代の「龍谷大学・京都産業学センター」に向けて

経営学研究科長
守屋　晴雄

このたびの『京都産業学研究』第 12 号の発刊に当たり弊学大学院経営学研究科長としてひとことごあいさつを申し上げます。

この小誌の発行主体は、「龍谷大学・京都産業学センター」です。センターに対しましては、平素よりご支援をいただきまして、改めて厚く御礼申し上げます。

「龍谷大学大学院経営学研究科付置機関　京都産業学センター」から本年度中途でこのように名称変更されました。実際は経営学研究科が中心となってセンターのお世話をするという構図は変わらないのですが、「全学的な組織に向かいたい」という方向性がこの名称変更に込められています。

私は、おおむねこれまでの「龍谷大学・京都産業学センター」（名称はこうではありませんでしたが）を第１世代のそれと考えています。現在、第２世代のそれに向かう転換期にある、と考えています。この転換期性については、いくつかの点から指摘されましょう。上記した大学の付置機関とする全学センター化への指向は１つの点です。

内輪の話で恐縮ですが、センターの運営をお世話する人の世代交代も転換期性の１つの点です。歴代のセンター代表などが定年退職を迎えたり、迎えようとしたりしています。退職によってお世話できなくなるということも実際上の大事な点ですが、私に象徴されるようにお世話の長期化によってセンターに対する自由な発想や柔軟な発想に乏しくなりかねません。

また、センターの事業内容、場合によっては、センターのそもそもの存在意義についても改めて検討する必要がある時期に来ていると思います。「不易流行」ではありませんが、変わらないものと変わるものを識別することがますます重要になるでしょう。京都産業に関する情報創造、情報発信をする社会的存在という性格は変えるべきではないと私は思っています。検討の必要な具体的な例を申しますと、センターの事業の１つである「京都工芸サロン」の運営が挙げられます。本来メンバーを少数に限定したサロンでしたが、

それでよいのか、という問題です。

転換期は、飛躍という離陸に失敗するリスクとしてもそれに成功するチャンスとしてもとらえられます。当然ですが、私としては、後者のとらえ方をしています。

冒頭に「ひとことごあいさつ」と申しましたが、あいさつの範囲をやや超えてしまいました。

今後とも「龍谷大学・京都産業学センター」へのご支援をお願い申し上げます。

2014 年 2 月 3 日